本を選ぶ

高校図書館版

NO.21 1996年（平成8年）5月10日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

本社 〒162 東京都新宿区下宮比町2-28 飯田橋ハイタウン517 TEL03-3235-6168

ぶっく・えんど

選書雑感

この春、40年あまり働いた学校図書館を退職しました。身も心も軽やかで爽やかな気持ちで辞めることができました。それは沢山の方にいろんな場面でアドバイスをいただいたことで、利用したくなる図書館にしていこうと思い続けることができたからです。また、カウンター側の人間として「何かを創り出す」よろこびをいつでも本が読める環境の中で味わえるという役得もあったからだろうと思います。

しかし、辞めた今も選書のことは気にしています。私が関わった図書館はきっと面白くもおかしくもない本を並べていたにちがいありません。私は本を選ぶのが下手でした。選書には多くのエネルギーを使ったつもりなのに届く本をみてはなんでこんな本を注文したのかなあと落ちこんでばかりいました。よその図書館をみて、えっ！こんな本が出ていたのか、この本があるとあの授業にも使えたのになあ、あの子がよろこぶだろうなあという思いをすることがありました。それから、一年分の予算を100～200万円としても40年では何千万円という金額になりますが、その1冊1冊の選書に自分も関わっていたことを思うと申し訳ないことをしたという悔いもあります。

私は選書については、選書をする人の個人的力量の部分と選書（資料収集も含む）をどういう方法・仕組みでするのかという部分にわけて考えています。私は力量不足であっても、その学校の選書システムがそれをカバーできるものであれば利用者にとってはプラスになります。でも15年位前から「選ぶ人」の数が減少していました。学校図書館としては教科関連図書は教科担当者に主として選んでほしいのですが、お願いしてもほとんど期待はずれでした。図書部又は係での選書も低調で司書に選書の大部分が重圧として伸しかかってくるようになりました。若い司書さんで、「本は全部私が選びます」と平気で言う人がいますが、私はその度にドキッとしていました。仕方なく選書も一人で背負いこまされているのが実情としても、視点を変えてみるとその位にしか学校図書館は教育の中に根付いていないのですね。

最近、私も加わっている住民運動で司書配置があり、その様子をみていますと「図書館専門の人がきた」ということで「すべておまかせ」の感があります。初めて学校図書館に就職して右も左もわからずにいるのに選書も一人でやっているそうです。市当局へ私たちが「研修の場の必要性」を問うても「有資格者ですから仕事はできるはず」と言われます。しかし、選書においてはやはり問題がおこっています。「こんな本を生徒にみせては困る」というクレームです。小説の中の性描写の一部ではないかと推察するのですが、その本をひっこめるにとどまっています。選書は勿論、どういう資料を収集するかということも含めて、図書館を学校の中でどう活かすのかという校内での合意ができないままでは、学校図書館はいつまで経ってもないよりあるほうがましの「余暇の善用」の域を出ないのではないでしょうか。（坂田　房）

★そんなときのためのブックトーク★

泣ける本教えて!!

仲俣暁生

『君は１６歳だった』

知合いが高校の司書さんに聞いた話なのですが、尾崎裕二さんという人の書いた『君は１６歳だった』（東京書籍）という本が生徒の間で評判なのだそうです。高校生が「なにか泣ける本はない？」と言って図書館にくるらしいのですが、この本をすすめるといつも好評で、読み終えて「尾崎祐二の新作はまだなの」と尋ねてくる生徒も多いとのこと。そこで早速読んでみました。

この小説は、亮司と理恵という十代の男の子と女の子が家を出て一緒に暮らし始める話です。理恵は生まれつき体が弱く、また再婚した母親の新しい夫とうまくいっていません。そのせいで深く傷つき、「自分なんかいないほうがいいのではないか」と思い詰めています。亮司はそんな彼女を救おうと、二人で駆け落ちすることを決意します。亮司の家庭環境や過去の生い立ちは、作品中にあまり深く描かれていませんが、中学まで赤く染めていた髪を黒く戻したという記述があるので、ちょっと不良っぽい感じの男の子だということが分かります。

男の子は仕事をみつけ、アパートを借り、そこで彼女とささやかな二人きりの生活を始める――そんな場面からこの小説は始まります。お金はないけれど、細やかな愛情に満ちた若い二人のアパート暮らしはとても瑞々しく描かれており、どこかしら作者の実体験が反映されているような気がします。

この本が出たとき、作者はまだ十七歳の若さでした。この本が今の高校生に愛読されているのは、自分たちと同世代の人が書いた小説ということもあるのでしょうが、純粋に彼女のことを思いやる主人公の姿に、誰もが心を打たれるのだと思います。

『屑屋の娘』

『君は１６歳だった』を読んで、学生の頃に読んだふたつの小説を思い出しました。ふたつとも外国の小説で、青春小説の古典ともいえる作品なので、ご存知の方が多いことと思います。

そのひとつはアラン・シリトーの『屑屋の娘』という短編です。この作品は、集英社から出ている同じタイトルの短編集に収められています。シリトーは、『長距離走者の孤独』（集英社）という作品で有名な、イギリスの＜怒れる若者たち＞と呼ばれる世代の作家です。『屑屋の娘』は、『君は１６歳だった』に出てくるのと良く似た、ちょっと不良っぽい男の子が主人公です。貧しい労働者階級の家庭に育った主人公は、屑屋の娘と恋に堕ちます。男の子は女の子のために盗みを働いて捕まり少年院に送られますが、そのあいだに女の子は事故で死んでしまい、あとには二人の間に生まれた赤ん坊だけが残される。その彼女の思い出をあとから男の子が回想する話です。

『ライ麦畑でつかまえて』

もうひとつは、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』（白水社）です。『君は１６歳だった』はこの小説ともどこか似ています。もちろん、『ライ麦畑でつかまえて』の主人公であるホールデン・コールフィールドと『君は１６歳だった』の亮司とは、生きている国も時代も、ものの考え方もまったく異なるのですが、「いま自分にとっていちばん大事なものは何か」を純粋に思い詰めた結果、学校や家庭からドロップアウトして新たな自分の人生を模索し始める、という点では同じです。この「純粋さ」こそが、これらの作品の最大の魅力となっていることはいうまでもありません。

『屑屋の娘』と『ライ麦畑でつかまえて』は、どちらも一九五〇年代に書かれたものです。＜ティーンエイジャー＞という存在が文学の世界で大きな役割を演じるのは、第二次大戦後のこの時代からだといわれていますが、それ以来何度もティーンエイジャーを主人公にした恋愛小説、青春小説は書き続けられています。『僕は１６歳だった』に出てくる男の子にもそんな、いつの時代にもどこにでもいたはずの＜永遠のティーンエイジャー＞の姿が感じられました。

『恋』

ところで、高校生という年頃は、純粋であると同時に、ちょっとばかり格好をつけたり、大人ぶってみたい時期でもあります。そんな＜格好つけたがり＞の生徒のために、こんな本が高校の図書館の片隅にあってくれるとうれしいな、と思う恋愛小説を次に２冊紹介したいと思います。

ひとつは、直木賞をとった小池真理子さんの『恋』（早川書房）という小説です。この小説は、60年代末から70年代はじめの学園紛争の時代を舞台にした、一種のミステリー小説なのですが、タイトルからも分かるように、この時代を生きた若者たちの等身大の恋愛を描くことに大きな比重がかけられています。

若い頃に殺人を犯して服役し、いまは出所して田舎でひっそりと暮らす女性がこの作品の主人公です。彼女は今や不治の病にかかっており、死を前にして、今まで誰にも語らずに胸に秘めてきた事件の真相を回想して語る、という形式で物語は始まります。

主人公は当時女子大生で、学生運動の活動家である男子学生と同棲しています。彼女はアルバイトで翻訳を手伝ったことが縁で若い大学教授と知り合い、すぐに恋に堕ちます。この教授にはすでに妻がいるのですが、彼女は夫の浮気を知っても怒らないばかりか、主人公の女子大生を夫と同じように慈しみます。生真面目な性格の主人公は、はじめはこの夫妻の自由な恋愛観に戸惑いますが、やがて、いつしかこの二人の奔放な生き方に魅せられていきます。この三人の間で繰り広げられる感情のドラマが、『恋』という作品の大部分を占めています。

やがてこの三人の関係は悲劇的な結末を迎えるのですが、暗い結末にも関わらず読後感は爽やかです。先頃この作者にインタビューする機会がありました。自ら信じるように生きた結果であれば、それが悲劇に終わったとしても決して後悔しないという、この主人公に共感する若い世代の女性読者が増えているとききました。

『恋愛のディスクール』

もうひとつは、植島啓司さんの書いた『恋愛のディスクール』（福武文庫／単行本はPARCO出版）という小説です。これは、恋愛に関する＜哲学小説＞で、パスカルという大学教授が主人公です。ロラン・バルトというフランスの思想家が著した『恋愛のディスクール』という同名の著作にインスピレーションを得て書かれた小説で、作中の端々に「わたしの魂を奪ったあの最初の場面は、つねに、事後になって再構成されたものにすぎないのである」「恋するわたしは狂っている。そう言えるわたしは狂っていない」といった、バルトの言葉が差し挟まれています。

「ディスクール」という聞き慣れない言葉は、ふつう「言説」などと訳されるフランス語ですが、植島氏のあとがきによれば、その語源は「あちらこちら走り回る」という意味のラテン語からきているそうです。植島氏はあとがきの中でさらに、「……恋する者はたえず心の中で走り回っており、新たな奔走を企て、自身に対する策謀をめぐらしつづけてやまない」というバルトの言葉も紹介しています。たしかに、この小説の中でも、恋する主人公はどこまでも逃避行を続けます。

この小説は、恋をしている最中に読むにはなかなかいい本です。恋愛中にふとしたきっかけでこの本を手に取り、ロラン・バルトの哲学を身近なものとして感じてくれる高校生はきっといることと思います。

そういえば、恋愛をしていると、本を読む量がふだんより増える気がします。そんなときは、恋というなんともアヤフヤなものへの手がかりを恋愛小説という教科書から探そうとしているのかもしれません。

なかまた　あきおさん：1964年生まれ。『シティロード』『ワイアード』などの雑誌の編集を経て、現在フリーランス。
編集・執筆活動のほか、代官山のＰ－ＨＯＵＳＥで毎月開かれているアートやコンピューターに関する自主講座「カフェゼミナール」の企画・運営を行なう。

●絵こらむ●

図書館改造計画

田村　修／文
高井　陽／絵

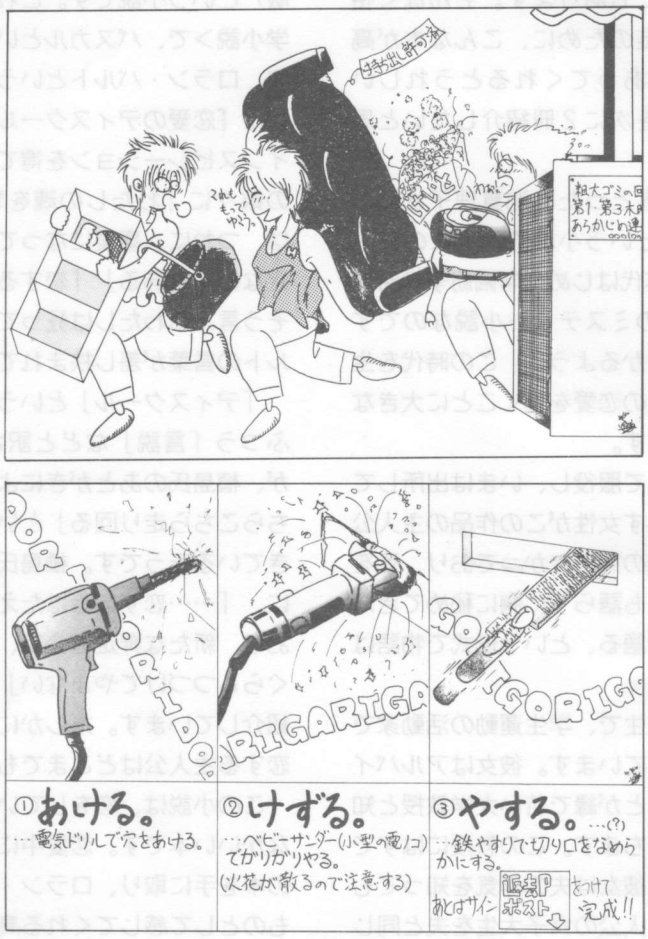
「司書！　ブツがおちてます！」高井君の報告に「よし、平山、頼む」と指名すると、「ガマ、来い」と後は芋蔓式。下級生たちが連れ去られて行く。

数分後、部隊は意気揚々と帰還。カラーボックスはコーナー作りに、テレビ台は大型本の別置用、ＣＤ収納ケースはそのものずばり。ドライフラワーは室内に飾られ、毛糸はショーウインドウ装飾用に大切にしまわれた。

ソファー、ガラスの小さなテーブル、ビデオの視聴用デッキ、時計、扇風機、書架もリサイクル等で手に入れた。

高井君はじめ何人かの神奈川県立菅高校生が中心になった「図書館改造計画」。利用が多くて居心地のいい図書館を目指して、より良いレイアウトや分かりやすいサインの作成に励んできたのだ。物品調達はほんの一例。僕にとっては図書委員というより、欠くことのできない図書館スタッフそのものであった。

この４月、僕は藤沢工業高校に転勤になった。着任式後、図書係の川村先生が現われた。川村先生も着任早々だ。館内を一巡した先生、ふいに壁をトントンと叩き始める。僕はピンときて、声をかける。「返却ポストできますか？」「この位なら大丈夫でしょう」。前任校で返却ポストを作って、これは必要だと痛感しました」と心強いお答え。24時間対応の返却ポストがあれば、「開いてなくて返せない」と本をその辺においていってしまうことはないだろう。さっそく事務長にかけあう。「返却ポストを作るため、図書館の壁に穴をあけたいんですが…。川村先生は前任校でもう経験ずみだそうです。だめだったら、元どおりにして下さると…」



決行は遠足の日。ウィーン、ボゴ、静かな校舎に電気ドリルの音が響く。ガー、目の近くまで火花が散る。鉄板２枚を両側から切り抜くのに所用時間はほんの１時間。さすが機械科の先生！

更に「返却ポスト普及委員になります」と有難い一言。希望があれば、他校へも出張サービスをしてもよいとのこと。川村先生に返却ポストを作ってほしい方は、田村までご連絡を！　但し、遠隔地の場合は宿泊の手配が必要です。そうそう、その際は事務長の許可をお忘れなく。キーワードは「だめだったら元通りに直しますから…」。

（たむら　おさむ：神奈川県立藤沢工業高等学校図書館）
（たかい　よう：神奈川県立菅高等学校ＯＢ）

返却ポストの出張製作問い合わせ先：TEL0466-43-3402
神奈川県立藤沢工業高等学校図書館　田村　修　宛

入力終わったよー！ 私のコンピューター導入奮戦記⑧

木下通子

2万冊の本にバーコードを貼る騒動から始まった「私のコンピューター導入奮戦記」も八回目、4年の歳月が流れました。コンピュータを導入したことで、利用は増える一方。その対応に忙しくて遡及入力の手はとまりがち。転勤の可能性も少しずつ現実のものになっているようですが…

電卓で足し算していたなんて嘘みたい

データが全部入ったんです！4月10日に新年度初開館して、一日の貸出を終えて、貸出統計をパソコンで出力したときのうれしさ。今まではパソコンでとった統計に、パソコンで貸せない本の貸出を加えて手計算していました。1991年から始まって約5年、長い道のりでした。特に、年度末の2月、3月はずーっとパソコンとにらめっこの日々。怒涛の2か月、私がどう過ごしていたか早くお話したいけど、そこを振り返る前に、まず遡及入力のアルバイトに来てくれたAさんがいた頃に話を戻しましょう。

Aさんからの手紙

まめでよく気がつくAさんは、9月から12月までの4か月の間一生懸命働いてくれました。その上、私がこの原稿をまとめているのを知って、自分の仕事をまとめた手紙をくれました。少し引用させてもらいながら、当時のことを振り返ってみます。

前号でもふれましたが、新規購入図書のデータ入力は、1992年度から行なっていました。Aさんが入力していくのは、おもにそれ以前に購入した本です。Aさんに入力を始めてもらう前に、私は1992年度以前の登録本で、業者から購入したデータ、J-BISCでダウンロードしたデータ、手入力データと何枚かのフロッピーに分れているデータを分類番号順にまとめる作業をしました。そしてAさんが分類順に配列されたカードをみながら、フロッピーをチェックし、データ入力がされていないカードを入力していきます。

ーまず、1992年度以前に登録した本のデータと基本カードを一件一件合わせてデータがあるかないか確認し、データがないカードは立てていきます。1992年以降に買った本についてはデータがハードディスクに入っているので、その中身をチェックして、データがあるカードは倒していきます。ここで立っているカードのデータを入力するのが、私の仕事です。

一箱終わると、立っているカードをJ-BISCで検索します。1960年代くらいの古い本、特に書庫に置いてある本などはJ-BISCに入っていないものが多くありました。J-BISCでダウンロードしたデータはLIBROSに変換します。変換したデータに図書記号をつけてこのデータは完成です。

ここまでやってデータがなかったものは、手入力します。ある箱は343件手入力しなくてはならず気が遠くなりましたが、覚えたてのワープロのキーボードをたたく音がカチャカチャとなんとも心地よく、OL気分で楽しく作業しました。大変だったのは、書名、著者名の読み方です。本に書いていない場合もあり、人名事典や典拠録で調べたりしました。

私が作業したのは、カードケース33箱中の27箱。途中から数の記録を始めたのですが、10,757件中、もともとデータがあったものが2,739件、J-BISCから変換したもの5,417件、手入力したもの2,601件でした。ー

一人じゃないって！

Aさんには入力のために来てもらったのだから、それ以外のことは頼まないと心に誓っていたのですが、たとえば私が出張する場合、いつもなら閉館していた10分休みもAさんに頼んで開けたままで出かけたり、ブックリストを作って綴じる作業が間に合わないときに手伝ってもらったり。不規則に食べていたお昼ごはんも、一緒に12時に食べるようにしました。相談とはいきませんが、本の話をしたり、仕事のことをおしゃべりしたり、一人じゃないってすてきなことだなーと、しみじみ実感しました。Aさんがとってくれた記録を元にどれくらいのデータがJ-BISCでヒットしたか見てみると、もうすぐ創立80年の当校で7割のヒットでした。

1月からまた一人になりました。基本カードのあった全ての本を分類番号別にAさんが入力してくれたフロッピーを、すぐにでもハードディスクに読み込んでデータのチェックを始めなくてはいけなかったのですが、この時期に入っても社会科の授業での利用があって、1月はその対応で手一杯でした。

ハッパをかけられる

特別に予算をもらっての作業ということで、図書部の先生たちも、作業の進み具合を気にかけていました。とにかく今年度中に作業を終わらせて、4月から全ての本をパソコンで貸出せるように頑張ろうと、図書部会で相談していました。そんな中でAさんのアルバイト期間が終わり、作業が止ってしまったのがかなり不安だったようです。

この4月に転勤してしまったY先生は、長く図書部にいてくれたこともあって、自分がいる間にパソコンをなんとかしなくてはと、私よりもこの作業に責任を感じていました。私の中にはだめだったら来年という気持ちが少しあったかもしれません。

2月に入って部の総括をする時期になり、Y先生を中心に、部内の2～3人の先生たちが今後の作業の段取りを考えてくれました。まず、Aさんが入力したデータをハードディスクに読み込んで、リストを打ち出し、それを元に、欠番のチェック。それから、貸出用のパソコンにもデータを読み込んで、バーコードリーダーを使った蔵書点検を試みる。それで、また欠番等をチェック。「図書館を開館しながらじゃ作業できないことは、木下さんが一番分かっているでしょ」という一言で、3月は作業のため図書館を閉館することも決めました。

2月の下旬、高校入試に関連して生徒が家庭研修をする日が数日ありました。そのときに何枚ものフロッピーに分れていたデータを司書室のパソコンのハードディスクに読み込んで、Y先生といっしょに約2万件のデータリストを打ち出しました。リストは単票で打ちだしたので打ち出しに8時間くらいかかりました。リストから欠番や二重登録をチェックしなくてはならず、私が「こういう仕事がいちばん大嫌い！」とかんしゃくを起こすと、「やらなきゃ終わらないでしょ」と、Y先生。ここ1～2年のデータも二重登録が意外とあって、ふだんの入力は慎重にやっていたつもりなのに…と、ショックでした。

司書室のパソコンに移したデータをとりあえず貸出用のデータに変換し、「かすぞう君」に読み込む、この作業に約半日かかりました。

最後の追い込み

3月の上旬には自宅研修中の三年生に手伝ってもらって、バーコードリーダーをつかった蔵書点検をしました。バーコードがはってある本が約19,000冊。バーコードリーダーをレンタルし、3台で作業しました。4,000件読み込んだデータをあやまって消してしまうハプニングもあったので、約三日かかりました。もっと慣れていれば二日で終わる作業だったと思います。

その後、蔵書点検のリストを打ち出しました。そうすると本があるのにデータが入っていない本が分かります。それと、LIBROSで打ち出していたリストとをあわせて、先生たちや図書委員と一緒に、欠番になっている本を探しました。この時点で3月も中旬になってしまい、4月開館をめざした今後の日程を改めて部会で検討しました。

本があって、データがあれば問題ありません。データがあるのに本がないというものも、普通の紛失と変わらないので今は考えないことにして、本があるのにデータがないものをいつまで探すか考えました。その時点で、データが入っていない本が約500冊見つかりました。その本は書架から出して、本を見ながら入力していくことにしました。3月中に入力を終わらせ、二重登録などもないようにデータをチェックするのはかなりな作業量です。その上に、貸出用のパソコンに読み込んだデータに番号違いなどのミスがたくさん見つかって、それも直さなくてはなりません。

私は一冊でも未入力の本を見つけて欠番を少なくしたいと頑張ったのですが、Y先生に「まずは見つかった本のデータ入力」と諭されて、とりあえず500冊の入力を始めました。

それから朝の8時から夜8時くらいまで、パソコンに向かう日々が始まりました。約500冊の

データ入力は2～3日で終わったのですが、ポロポロと未入力の本が見つかって、それも入力して行きました。入力したデータはとりあえずフロッピーにためて、本当にないデータかどうか確認してハードディスクに読み込みます。

そして、とうとう3月28日、約2万件のデータをハードディスクに入れて、チェックを決行しました。一人でコツコツ14時間かかりました。データを100番ずつ分けて見ていき、ついでに欠番を書き出します。ここでまたまた二重登録が見つかり、同じデータが二回入っている場合は単純に削除して、違う本の場合はどちらの本が正しいのか本で確認していきました。休まずパソコンを見続けたので、夕方には頭がガンガンしていたのですが、全部終わった時にはやったー！と小踊りしてしまいました。

4月になって…

4月に入ってから、今度はハードディスクからバックアップをとる作業をしました。1,000件ずつデータを分けて、フロッピーに移して行きます。入ったデータは全部で19,730件中19,334件でした。結局396件分が未入力。でも、この分については、本もなく、基本カードもないのでどうすることもできません。貸出をするときに「この番号は使われていません」という表示がでたら、データ入力をしていこうと思っています。

次にかなりの入力ミスがあった貸出用のデータを一回全部消して、もう一度読み込む作業を一日かけて行いました。これはパソコンにくわしい人でないとできないので、情報処理科の先生といっしょに作業しました。

そうこうしている間に、新年度の開館準備が押し寄せて来ました。新一年生のＩＤカードの発注、新入生のデータは一学年の先生方が作ったデータをもらうことになっているので貸出用パソコンに読み込むだけですが、クラス替えがあった二年生のデータの訂正など、やっぱり目の回るような忙しさでした。

パソコンだけで貸出を始めるとなると、バックアップの問題も考えておかなければなりません。ハードディスクが壊れてしまって大騒ぎになった学校の話も聞いていたので、そんな怖いことにならないように、事務室に無理を言ってハードディスクをもう一台買ってもらいました。それから、一日の最後に、新しく買ったハードディスクにもその日の貸出データのバックアップをとっています。予約処理をどうするかなど、「かすぞう君」自身が抱えている問題は多々あるのですが、とりあえず、とりあえず今は、ピッピッと、すべての本がパソコンで貸出されています…。

（きのした　みちこ：埼玉県立岩槻商業高等学校図書館）

DMかたろぐ

新版地学教育講座

責任編集＝地学団体研究会／全16巻

A5判／各2575円／全巻函入セット定価41200円

地球から宇宙までの生きた自然の姿を最新の具体的な資料をもとに学問の進歩を的確につかんで平易な表現で記述したシリーズ。

①地球をはかる②地震と火山③鉱物の科学④岩石と地下資源⑤地球内部の構造と運動⑥化石と生物進化⑦地球の歴史⑧日本列島のおいたち⑨地表環境の地学-地形と土壌⑩地球の水圏-海洋と陸水⑪星の位置と運動⑫太陽系と惑星⑬宇宙・銀河・星⑭大気とその運動⑮気象と生活⑯自然と人間

東海大学出版会

〒151東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 Tel.03(5478)0891 Fax.03(5478)0870

スクールカウンセラー

―その理論と展望―

村山正治／山本和郎編　教師と連携しながら、不登校、いじめ、非行等に対処していく、進路指導でもなく糞護教諭でもない新しい役割の方向を提示。二五〇〇円

不登校

精神科医・森下一のたたかいとその仲間たち

橋爪竹一郎著　数多くの悩める子どもに接した医師は、診療室を飛び出し、親に呼びかけ、周囲を巻き込んで新しいフリースクールの実現に奔走する。一八〇〇円

子どもの発達と父親の役割

牧野カツコ／中野由美子／柏木恵子編　三二〇〇円

ミネルヴァ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

☎075(581)0296 振替01020-0-8076

高校の現場からの感動の報告！

保健室の先生

養護教諭の実践記録と精神科医のコメント

福岡大学医学部助教授　堤　啓　監修
思春期発達研究会　ふくおか　編

二十年以上の経験を持つベテランの現職高校養護教諭たちの感動的な活動記録と、その活動をあたたかく見守る精神科医のコメントが、現代の青少年がどんな悩みを持ち、どんな働きかけが彼らを力づけたのかをいきいきと描き出します。

四六判250頁　定価2,060円（本体2,000円）

Ψ金剛出版　〒112 東京都文京区水道1-5-16 ☎03-3815-6661 Fax03-3818-6848

限りなく広がる知識の世界

辞典500点突破！

日本史年表 増補2版　2,266円
遺跡が語る古代史　田辺征夫編　2,575円
東京語のゆくえ　国学院大学日本文化研究所編　2,575円
江戸小咄類話事典　武藤禎夫編　2,987円

東京堂出版　〒101 東京都千代田区神田錦町3-7 ☎03(3233)3741　図書目録進呈

〈シリーズ〉基本を学ぶために［全15巻］

1. 弓道のすすめ　定価1,200円(税込)
2. 空手道競技入門　定価1,200円(税込)
3. すばらしい登山　定価1,200円(税込)
4. ボクシング入門　定価1,200円(税込)
5. 陸上競技入門　定価1,500円(税込)
6. 最新レスリング教室　定価1,200円(税込)
7. 卓球〈カットマン編〉　定価1,200円(税込)
8. スポーツ・ボウリング　定価1,700円(税込)
9. 体操競技　定価1,700円(税込)
10. なぎなた入門　定価1,500円(税込)
11. 楽しいテニス　定価1,800円(税込)
12. 水泳　定価1,700円(税込)
13. 剣道　定価2,300円(税込)
14. バドミントンのすすめ　定価2,300円(税込)
15. サッカー　定価1,800円(税込)

※各巻A5判・2色刷　セット定価23,500円

体育・スポーツ総合出版　株式会社ベースボール・マガジン社　〒101東京都千代田区三崎町3-10-10 ☎03(3238)0181 FAX03(3238)0084

PLANT A TREE　MEMORIAL BOOK for everyone

101本の緑の物語

工作舎＝編
●定価＝999円(税込)
●B5判並製・128頁

毎日生活をしている中で自然を感じる瞬間や場所があります。たとえば庭にやってくる鳥、季節ごと咲く花、台風‥‥。

四季の写真、52篇のアンソロジー、有名無名48人のメッセージで自然こ想いを馳せる。

大鹿智子描くミニストーリーで植物を育てる喜びを感じる。

それぞれの身近な自然を見つけてください。

PLANT A TREE

PLANT A TREE MEMORIAL BOOK for little ones

ミドリちゃんとフシギの木

工作舎＝編
大鹿智子＋田辺佳子＝絵
●定価＝999円(税込)
●B5判並製・オールカラー56頁
●身近な自然探検ノート付

工作舎　〒150 東京都渋谷区松涛 2-21-3　phone. 03-3465-5251　fax. 03-3465-5254

大日本図書の新シリーズ

調べて学ぶ日本の伝統

全5巻　B5変型判　定価各3000円●日本が誇る各種の伝統文化・工芸品などを、豊富な写真で解説した図鑑集。

おもしろ落語図書館

全5巻　A5判　定価各1800円●楽しい古典落語の世界を口演そのままに再現。随所に解説、豆知識がつき10話収録。

学校のまわりの草木図鑑

全4巻　B6判　定価各2500円●校庭・通学路などで見つける雑草といわれる植物を、全ページカラーで季節毎に紹介。

●定価は税込です。

大日本図書　〒104 東京都中央区銀座1-9-10 ☎03(3561)8679 FAX.03(3561)3065

創業110周年記念企画

KAWADE 夢新書

創刊 5/23

宇宙、自然、人間、社会……森羅万象の不思議と、謎に迫るライトサイエンス新書、創刊。

4冊同時発売
人はなぜウソをつくのか ―― 渋谷昌三
電磁波の正体と恐怖 ―― 小山寿
脳とテレパシー ―― 永戸豊野
動物たちはこうして会話する ―― 濱野恵一

●創刊第2弾、2点、7月上旬刊行、以下毎月2冊配本　●定価680円

河出書房新社　東京都渋谷区千駄ケ谷2-32-2　電話03-3404-1201